深川探索

二人の偉人
伊能忠敬・間宮林蔵

江戸時代，門前仲町を含む深川には多くの著名人が居住していました。松尾芭蕉，滝沢馬琴，松平定信，市川團十郎，鶴屋南北，佐久間象山などです。そして，今回の深川探索では，農民出身にもかかわらず，公僕として生きた江戸時代後期の伊能忠敬と間宮林蔵に触れることにします。二人は現在の千葉県と茨城県の境を流れる利根川水系の，土と草の臭いに満ちた農村で青年期を過ごしました。二人は田園風景が広がる利根川の堤防に立ち，夜空に光輝く星を眺めては，自然の雄大さに感嘆しながらも，それに立ち向かう自らの生き方を探りました。

伊能忠敬は，九十九里に近い上総国山辺郡小関村の名主の子として生まれますが，幼くして母を亡くし，苦難の少年期を過ごします。その後，18歳で佐原の伊能家の養子となった忠敬は，名主として家業を興隆させ，利根川の氾濫や飢饉に苦しむ農民を助け，佐原領主から絶対的な信頼を得ました。50歳になって，家督を息子にゆずると，この深川黒江町（写真－1）に移り住み，浅草竹町（現在の台東区浅草橋3丁目）の天文方に通いながら，測量術を身につけました。そして，寛政12年（1800年）忠敬55歳の時に，自ら願い出て，蝦夷地を含む東日本一帯の調査に出発しました（第一次調査）。

写真－1　伊能忠敬住居跡

60歳を過ぎてからの第五次調査は，東海道，伊勢，紀伊半島から山陽道の岡山まで及びました。その後，調査は十次まで続きますが，西日本，四国や隠岐の島，そして九州全域を歩き，70歳になっても近畿地方や中部地方まで測量の旅を続けます。彼は出発に際し，必ず富岡八幡宮（写真－2）に旅の無事を祈願しました。そして「大日本沿海輿地全図」の作成途中，深川から移った八丁堀において74歳の生涯を閉じました。

写真－2　富岡八幡宮

一方，間宮林蔵は，安永9年（1780年）常陸国筑波郡上平柳村（つくばみらい市－旧筑波郡伊奈町）の農家の跡取り息子として生まれました。利根川水系小貝川の堰とめ工事の際に，普請役人にその技量を認められ，下僕として江戸に連れて行かれました。20歳の時，蝦夷地の調査に帯同させられ，この蝦夷地に一次調査で訪れていた35歳年上の伊能忠敬と出会い，後に測量術の教えを請うことになります。それから，当時の「樺太は半島」との定説を確認するため，彼もまた忠敬と同様にその探査を願い出て出発するのですが，それは極めて困難な旅となります。寒さに生き抜く工夫をしながら樺太沿岸を北上し，ついに樺太が島であることを発見しました。林蔵は，さらに単身海峡を渡って対岸（シベリヤ東韃地方）に上陸し，アムール河をさかのぼって，ロシアの影響力が樺太に及んでいないことを確認します。それをまとめた「東韃地方紀行」を一読した幕臣達は，農民に毛が生えた程度の身分であった林蔵の行動力に驚嘆したと言います。やがて，伊能忠敬の一次調査では不十分だった蝦夷地の全域は，忠敬から学んだ測量術を駆使した林蔵が正確に測量することとなり，忠敬の死後，彼の弟子によって完成された「大日本沿海輿地全図」に生かされることになります。

写真－3　間宮林蔵墓

写真－4　仙台堀

林蔵は，天保15年（1844年）富岡八幡宮の北側，深川蛤町において65歳で亡くなりますが，現在は生まれ故郷の上平柳にある専称寺と，富岡八幡宮にほど近い江東区平野2丁目に墓石が残されています（写真－3）。

この深川一帯には今でも堀割（写真－4）が縦横に走っています。江戸時代，そこは上方からの物資を満載した千石船や材木を運ぶ筏そして夕涼みの船でにぎわっていたことでしょう。川面に跳ねる魚。川岸に連なる白壁の土蔵や料理茶屋。黒塀に囲まれた大名屋敷から高く聳える松。早朝，物音一つしない路地に響く蜆売りの声。二人が拠点とした江戸の風情は，すっかり消えてしまいましたが，わずかに残された彼らの遺跡には，身分を超えて自然を歩き抜いた，忠敬と林蔵の圧倒的なエネルギーが込められているのです。

その1　☆文・写真　川相 章
本誌編集小委員

【参考資料】●「伊能忠敬」童門冬二　学陽書房　●「間宮林蔵」吉村昭　講談社文庫
●東京時代MAP「大江戸編」　新創社　●江戸を歩く「田中優子」集英社
資料収集：茨城県伊奈町「間宮林蔵博物館」　江東区「深川江戸資料館」